



毎月十五日発行 所 社
行 大 会
像 像 社
宗 像 大 社
〒811-35 福岡県宗像郡志海町
電話 0940-22-1311内
定価 一年送料共 1000円

神具・装束
結納式場用品
株式会社 井筒
福岡店 福岡市博多区東公園一三二(〒812)
電話 福岡(宅)六五一一九四五六番
本店 京都市下京区油小路六条北入(〒600)
電話 京都(宅)三四一三四一四番
電話 三四一三三三四一四番

四百年ぶり解体工事完了す

宗像大社

中津宮御本殿竣工

御修復工事の経過



桃山時代の建築様式を伝える当社中津宮本殿(重文、流れ造り)、と同様な建築様式の三間社流れ造り、眞指文化財、宗像郡大島村鎮座は、昭和十八年御屋根葺き替え工事以降、風雨と鳥害のため椼皮葺の屋根が傷み、また殿内の柱もシロアリに蝕まれていたことが最近の調査で判明し、これを受けて県教育庁文化課は平成七年、八年の二ヶ年にわたる本殿建物の解体修理工事を決定した。

工事は施工監督を(財)文化財建造物保存技術協会(以下文建協)に一任し、木工事等は当社社建建物修改造事に経歴豊かな弘江組(宗像市旭丘)に委託した。また、これに対する工事費として総工費一億五千万円が計上された。

平成七年七月十五日、中津宮において修復工事着工報告祭、同十七日、仮遷座報告祭を厳行、同夕刻に御動座を行い、御神体は仮殿に奉安された。この後、文建協は殿内の詳細な調査に着手し、柱、桁、板等個別に記号・番号札を添付して、調査図面の作成と個別工事の見積りを行った。

十一月、仮設工事のパイプ、継ぎ手、足場材が中津宮境内に搬入され、土俵上に現場事務所が組立られた。十二月、鋼管で素屋根組立が始まり、中津宮本殿は高さ十米、二百平米の波打タン屋根で覆われ周囲はマツシートで囲われた。本殿右側の広場には工作小屋が建てられた。平成八年一月、本殿屋根の高い庇に平行して左右、後方の三方に広い足場が設けられた。そして更に原寸チェック図面が作成された。二月から屋根の千木・檼木箱棧が降ろされ、傷んだ椼皮が取り除

かれ小屋組・化粧垂木が丁寧解体された。三月に入り、斗組(柱上にある四角の支え木)、床組軸組と順次解体が進み、本殿の礎石だけとなった。四月から解体材の整理と古材の補修・埋木の作業が慎重に行われ、補修された材は化粧垂木、桁、柱等棟材は腐食が進んでいたという。特にこの解体の過程で、本殿前面基礎に近い足固めの横木(174×18cm)・材質は檜に「承応四年」の年号が墨書されている事が判明した。承応四年は今から三百四十一年前の江戸前期(1655)で、古文書によれば中津宮社殿の創建は永祿九年(1566)と伝え、これ以外に古い記録が残っていない。創建後九十年を経て修復工事が行われたことを窺わせるに足る貴重な資料の発見といえよう。

六月には、補充の新材加工がなされ、七月に塗装、古材洗い、八月の暑い最中、本殿基礎周りのカヌパラの補修が行われた。小屋材から薬品が塗布され、九月から柱の組立てが始まり、十月に小屋組立て、屋根の野地板が張られた。十一月に屋根葺き工に入り、今までの椼皮葺きと柿(けり)に改められた。これは椼皮葺き以前の屋根修理が板葺き、或は小板葺き等と記されており、これに基づいて従前の形式に復元したものである。年の暮れから箱棧が上り、当社独特の丸棧三本、方形特の丸棧三本、方形特の丸棧三本が据えつけられ、千木が付けられた。平成九年一月、本殿を覆っていた素屋根が解体され、美しい流れ造りの本殿が陽に映えた。二月に入り飾り金物を各所に取り付けられ、金色が一段と輝いた。創建以来四百三十一年を数え、承応四年から三百四十年振りの御修復工となる。この度の御修復工事に内外各地の多くの方々から温かい御支援・御奉賛を賜り誠に有難く誌上より厚く御礼申し上げます。



中津宮・辺津宮御殿修復 (平成の造営記録)

年号	事項
永祿五年 (一五六二)	この冬鳥ヶ嶽城完成 大宮司氏貞これを本城とす (宗像軍記他)
永祿九年 (一五六六)	十月 大宮司氏貞 中津宮本殿を造営す (筑前国続風土記拾遺十七他)
天正六年 (一五七八)	五月二十八日 大宮司氏貞 辺津宮第一宮本殿を造営す 五間社流造 小板(柿)葺(第一宮置礼他)
天正十八年 (一五九〇)	六月 筑前国主小早川隆景 辺津宮拝殿を造営す 単層瓦葺 (第一宮御造営記録)
正保六年 (一六四四)	十月 沖津宮御遷宮を行う (沖津宮指出目録)
明暦元年 (一六五五)	この年 中津宮本殿解体修理を行う (平成七年の本殿解体修理工事により「承應四年」の墨書銘がある足固めの横木発見)
文化元年 (一八〇四)	五月 中津宮遷宮を行う (中津宮社記并家記録)
文化十四年 (一八一七)	九月 中津宮本殿屋根葺替 (一)甲斐諸記録 ○この年より平成の本殿解体まで十回修理工事を行う (中津宮明細図書他)
大正三年 (一九一四)	十一月 中津宮本殿屋根葺替 小板(柿)葺を椼皮葺に改む (宗像神社建造物新築并修繕記録)
大正六年 (一九一七)	十一月 辺津宮本殿・拝殿解体修理 (一)七年五月 本殿屋根瓦葺を旧来の柿葺に改む (辺津宮明細図書)
昭和二十八年 (一九五三)	十二月 中津宮本殿屋根葺替 (一)二十九年四月 (宗像大社營繕記録)
昭和四十四年 (一九六五)	七月 辺津宮本殿解体修理 (一)四十六年六月 昭和の大造営
平成七年 (一九九五)	一平成の造営始む 八月 辺津宮拝殿屋根葺替 単層柿葺 (一)九月 十月 辺津宮神饌所屋根葺替 銅板葺とす (一)九月 中津宮本殿解体修理始む 三間社流造 椼皮葺
平成八年 (一九九六)	三月 辺津宮清明殿改造 (一)十月 八月 辺津宮境内地防災施設整備 (一)十月
平成九年 (一九九七)	二月 中津宮境内地防災施設整備工事始む 三月 辺津宮御垣内透塀改造工事始む 屋根は旧来に復し椼皮葺を柿葺に改む

春季大祭齋行

神苑に悠遠な平安絵巻

桜前線日本列島を縦断する中、三月三十一日より四月一日まで宗像大社春季大祭が厳粛に運行された。祭典に先立ち、三月二十九日地元総代並びに協力会

は宮内省の奉仕により祭典準備が行われ、生憎の雨にもかかわらず作業は無事終了した。三月三十一日、午後五時より総代地祭、同六時から



定刻午前十一時、養父宮司以下神職、氏子奉幣使、又巻纏の冠、萌黄色の装束の上、太刀を佩いた主基地方風俗舞奉仕者、十二軍の衣装を着た浦安舞の乙女連、地元総代等が大鼓の合図により参進し、祓舎にて修祓を行った。

春季奉納剣道大会

平成九年三月二十日、当社の春季奉納剣道大会と同じ日に、京都武道館で国際剣道大会が行われた。

合は、前日までの大雨で開催が危ぶまれたが、天が味方し、少々肌寒かったが晴天に恵まれた。

平成九年三月二十日、当社の春季奉納剣道大会と同じ日に、京都武道館で国際剣道大会が行われた。日本は九連覇して優勝しているもの、年々外国のレベルは向上して、今年は昨年まで快勝していた韓国に苦戦、大将戦を制して辛くも優勝する事が出来た。

コテ、メン、ドーと、日本語で発する掛け声や、さまざまな気合だけでテレビを見てると、世界の侍達が出合をしている様には見えないが、面を取るとそこには、アメリカ、イタリア、ブラジルやアフリカの選手も出場している、剣道も日本だけのスポーツではなく、世界に普及している事が窺える。今年の当社奉納試



を奉仕した。

続いて神楽を奉納、地元田島地区青年の奉仕により、宮中舞臺の手振りを伝えた。主基地方風俗舞が奏された。この神楽は、先の昭和天皇御即位の御、大嘗祭大饗宴で奏された舞で、それ以降特別の忌召しを以て当社に下賜、伝承されている貴重な神楽である。更に世界平和を祈念された昭和三十九年製の神楽、合わせて皇御製的神楽、合わせて華麗に舞う浦安舞が、地元玄海中学校女生徒により見事に奉納され春告げる緑の神苑に悠遠な平安絵巻が繰り広げられた。



尚、若布献上奉仕者の感謝状及び記念授与、若布は次の通り。

- 神楽漁協 浜田 充
- 浦上 折男
- 鐘崎漁協 入江 久夫
- 津屋漁協 榎田 一利
- 福間漁協 関谷 岩夫
- 大島漁港 田畑 洋一
- 今里 秋田
- 山崎 武広
- 児島 敏治

三月十四日、宗像郡遺族会総会。

三月十五日、月次祭。宗像大社菊花会理事會三月十六日、(株)新出光新人社奉告祭行式。

三月二十日、皇霊殿遷葬式。三重テレビ放送報道制作部長橋本真一氏中津富取材の件にて来社。

三月二十五日、九州旅客鉄道(株)東郷駅長花田勝志氏退任並同駅長黒川武征氏新任挨拶の為来社。

三月二十六日、田島区遺族会総会。出光興産福岡支店総務課山本眞路氏氏任挨拶の為来社。

三月二十八日、宗像大社大任役員。三月二十九日、地元総代並協力会春季大祭諸準備奉仕。

三月三十日、春季奉納剣道大会。甘木市高木中学校第十五回卒業生手島功氏他二十四名参拝。

三月三十一日、春季大祭奉納。神社本庁理事丹生晃一氏他三名参拝。

合も、午後二時には出場者一人も怪我する事なく、無事終了した。試合結果は次の通りです。

- 男子高校の部
 - 優勝 宗像高校A
 - 準優勝 宗像高校B
 - 三位 東海大五高校
- 女子小学生の部
 - 優勝 自由ヶ丘剣道教室A
 - 準優勝 河東剣道教室A
 - 三位 南郷剣道教室A
- 女子中学生の部
 - 優勝 中央中学
 - 準優勝 城山中学A
 - 三位 城山中学B
- 女子高校・大学の部
 - 優勝 福岡教育大学
 - 準優勝 宗像高校A
 - 三位 宗像高校B

社務日誌抄

三月一日、月次祭。出光興産松本支店長八十島碧海氏参拝。福岡県宗像神社宮司神田典明氏他十一名参拝。

三月二日、高知県神道青年会々長小原氏他四名来社。

三月五日、岡山県神社庁々長湯浅正敏氏他一八〇名参拝。第十七回福核談話会開催(勸励使館)。

三月六日、新潟市代表取締役専務藤村富信氏他五名参拝。

第四十回 宗像大社歌会詠草

大野 展 男 選 毎月末日ノ切

田野 森 甲子 風と共潮の満ちる釣川の河口に白き波立ちやます

(評) 時化の日の女界離も見えようである。「河口に白き波立ちやます」と表現しての「ある」叙景歌となつた。

自由ヶ丘 調 貞子 谷深く雪を被りし裸木の枝は樹氷となりて輝く

(評) 前の歌の海に対しこちらは山、余情をまじえず見たものを率直に詠つてきびしい冬山の景を描き出している。

宇美 岩男 巨花びらが水面覆へる街川は満ちる潮に暫したため

(評) 今年の桜は早かつた。その桜の花夜を詠つているのだが、普通は美しいと言えない街川をひとと彩つた花に対する愛惜の情がかげえる一首。

鐘崎 安水 久子 孫よりのレインタインのチョコレット夫が開けば孫が先づ食ふ

(評) 次の石松作品と共にユーモラスな作風、歌の中では別に言っていないが、孫と祖父との親密な日常生活が父と父の孫に伝へる。送つた孫と食べた孫は別人か同一なのか、はつきりすれば嬉しいのだが。

徳重 石松や寿子 一握りの土筆のはかま取る間にほつきりて見ている作者のさみしが見える。

ひかりヶ丘 藤原まさと 八十六は母の天寿なりしやとわれとわが問ふ山茶花咲けば

(評) 昔なら大母でも今では八十六歳は天寿とまでは言えないのでは、そんな気持の揺曳がうまく詠なれ「山茶花咲けば」の具体が生きている。滝口作品と共に一途なやさしさがい。

土穴 瀧口 敦子 近く住む至寿の母は臙臙と我が家の道のみを往き来

田久井上 光 七十歳の春の記念、英彦山に買ひし魔除のからから配る

福岡東 板矢 美春 久びさの工展を見終りて娘と呑みしコーヒうまし

朝野 藤井 浩子 街中の上ぐる程の木木に手を触れ頭を下げる女あり

吉留 高山 信子 美しき地よりもさらに美しき天へと友は逝きたり

大島 越智 治子 打ちつくる波のとどろく波止先の標識灯は赤く灯す

自由ヶ丘 細川 絹子 風清く人影まばらの境内に天を仰ぎて眺む唐獅子

名古屋 小田 喜一 兆したる老の孤独は秘めしまま変わりなきか子の子のたつき問う

福岡中央 山下しづえ 目覚れば笠をかぶりし六地蔵いつくづくのか桜散るなか

武丸 中村さつき 茶柱の立ちしと古稀の夫を寿き穩し朝のひととき過

九十六の翁手振りして歌ふ

